

総 括

小 峯 和 明

立教大学の小峯です。国際日本文学研究集会委員会の委員長ということで、年数が長くて歳とっているというだけで、別にえらくも何ともないんですけれども、恒例により、総括的なご挨拶をさせていただきます。

今年は数えて30回ということで、30周年にあたるわけですが、近年国際会議というものが、日本の大学あるいは海外の大学でも頻繁に開かれるようになりまして、「国際と学際」というのが、日本文学研究の一つのキーワードになっているかと思います。その点でいえば、資料館がこの国際集会をもう30年も続けているのは、ほんとに老舗とっていいのではないかと思います。

今回も、13本の研究発表と、4本のポスターセッション、それからただいまのご講演と、たくさんの行事が詰まっておりますが、毎年内外からの発表応募者が非常に多くて、夏にいつも選考の委員会を開くんですが、どの人をお願いして、どの人を落とすか、委員一同頭を悩ませております。その対策として昨年から、ポスターセッションをやるようになりまして、今年が2年目で、少しく軌道に乗ってきたように思います。

今回「表象と表現」という、全体的なテーマになりましたが、よくよく考えると、分かったようでよく分からない言葉ですね。ちなみに辞書をみると、「表象」というのは意外にも漢語、中国の古典語としてある言葉で、あの司馬遷の『史記』などにもすでに出典があるんですね。しかし、日本ではあまりこの言葉が使われた形跡がなくて、やはり明治になって近代の翻訳語として使われだして、今「表象文化」学とか、さまざまな大学の学科名にもなるほど、定着した言葉になっています。

それから「表現」の方は、意外にも中国の言葉ではないんですね。和製漢語

で、例えば『大漢和辞典』などには出てこない言葉でして、これもやはり、おそらく明治近代になってから使われだした言葉ではないかと思います。詳しくまだ検討しておりませんが、しかしいずれの言葉も、もはや日本文学研究には欠かせないテクニカルタームになっているわけですし、自ずとこういう用語を使ったときから、近代の枠組みにはめ込まれてしまうことを、常に自戒しなくてはと改めて思いました。

逆に言えば、「表現」などという言葉抜きに、もう我々は研究できないといっているくらいだと思いますので、常にこういう言葉を、再定義といいますか、再更新しつつ、認識を更新していかなければならないだろうと考えています。

特にこの「表象」という言葉が前面に出てきたのは、これも詳しく調べていませんが、おそらく1980年代ごろではないかという印象があります。80年代あたりは、いろんな面で変革が起きた時代で、特に学問研究も大きく変わりだした時代だと思います。おそらくその背景には、例えば文学の問題も、文学作品という文字中心だけでは捉えきれない世界に、いろいろ皆が気がつきだして、それに代わるものをいろいろ探し出したときに、恰好の言葉として浮かび上がってきたのではないかと思います。これは歴史学をはじめ、文字中心の世界を相対化しようとする、人文学全体の問題としてあったのではないかと思います。その結果、身体や芸能、音声、声、これは柳田国男などが昔から掘り起こしてはいたんですけども、あるいは絵画とか映像、イメージの問題ですね、そういうさまざまな媒体の多様性が再発見、再認識されて、それらが文学の研究のカテゴリーに流れ込んできたという状況だろうと思います。昨日の研究発表でも、近世、江戸時代の出版テキストの発表が多かったんですけども、版本にはたくさん挿絵がついている。以前はその絵を無視して、本文だけが問題にされていたんですけども、もはや、その絵を無視した研究は成り立たない地点に至っていることが、昨日の発表でもよくお分かりいただけたかと思います。

あるいは、絵双六のように、物語を絵画化するだけではなく、さらにそれを

ゲーム化していくような問題とか、あるいは、庭園と漢詩文、それに図像のイメージも関わってくるといった、非常に多面的で複合的な世界が掘り起こされてきています。

逆に失われてしまった芸能を、文字資料を徹底的に突き詰めることによって、復元していこうという方向の研究もございました。それから、本日の午前は、和歌を中心にした発表が2本ありましたが、「境」とか「をり」とかいった一つの言葉を精緻に追求する、これは伝統的な方法ではありますが、言葉の、「境界」ですね、「をり」も時間の境界とっていいでしょうか、空間の境界とあわせて問題がでてきたことも、午後の問題とリンクしてくるかと思いました。

それから『伊勢物語』の注釈の発表がありましたが、これも中世文学研究あたりで非常に活発になってきた面です。注釈は単に受身の行為ではなくて、一種のこれも翻訳で、ひとつの解釈ですけれども、注釈によって新たなテキストが再生産されていくということですね、『伊勢物語』の注釈は、『伊勢物語』の新たなテキストを呼び起こしていく、そういう運動体になっていることがうかがえるかと思います。

それから午後は、旧植民地の朝鮮、台湾のさまざまな言説、あるいは、そこで生まれた短歌とか小説といった文芸の問題が取り上げられまして、これも近年ポストコロニアリズムという、近代文学の一つの潮流になっている問題かと思っています。これに、昨日のポスターセッションの最後の、タイにおける日本版オリエンタリズムとってよい、非常に興味深いご報告もありました。

それと、最後のご報告の教科書の問題も、期せずして、最後のアハマド先生のご講演の、戦後を問い直す問題とつながってきたわけですが、研究と教育が分かち難く連動していて、むしろ教科書とか教育制度を見ていくことによって、研究のあり方が再照射されるといいますか、再定義される、そういった方向のご研究だったかと思っています。

このように見ますと、この国際集会においては、現代の日本文学研究が直面している問題が、非常に突出して出てきているという印象を強く持ちまして、

たいへん興味深くうかがわせていただきました。

大雑把にまとめて、私なりの印象で申しますと、二つほどトピックがあるかと思いますが、一つは従来の、作家作品の一对一の固定化した関係を主とする研究が崩壊している、オリジナル幻想の崩壊とっていいんでしょうか、つまり作品は実に多様であって、一つのものから一つのが次々と生み出されていく、連続した運動体の総体が作品であるというように見なしうる、そういう方向が今開かれているように思います。

これをちょっと例にたえますと、私は中世を中心に研究しておりますので、比喻でいいますと、仏から仏が生まれるんですね。仏が光を放ってそこから無数の化仏がまたいっぱい生まれてくる。そうすると、その仏と化仏は同じなのか違うのか、これは結局同じであって違うわけですね、同一にして同一にあらずということで、まさしくこのテキストからいろいろなテキストが生まれてくるという関係は、仏と化仏の関係に准えられるかと思っています。

それから、もう一つは、やはり日本の見直しということだろうと思います。日本文学研究の、日本というのは一体な何なんだろうかということです。旧植民地の問題もそうですし、それからご講演にあった沖縄の問題もそうですし、日本の見直しが至るところで進んできている。特にアジアに対する視点は、どの時代どの分野でも不可欠になってきているとって過言ではないと思います。

例えば、この国際集会でも、和漢比較文学的な研究発表が多いと思いますが、従来ともすれば、和漢比較というと日本と中国の一对一対応が中心ですね、言ってみれば中国を絶対的な権威、典拠として日本のものが生み出されるとして一方向の受容論に終始していたわけですが、しかし、同じような問題は朝鮮半島にもあったし、ベトナムにもあったわけです。つまり、漢文文化圏、最近は漢字文化圏ではなくて漢文文化圏という言い方で言われるようになってきますけれども、そういう単一的な一对一対応ではない、双方向の、あるいは、もっと多面的で多極的な比較文学の方向性が出始めているのも最近の研究の動向で、それも日本の見直しにつながるだろうということです。

それから、もう一つには、戦後数十年たった今日においては、さまざまな学

会が数十周年を迎え、記念の行事がいろいろ続いております。

例えば今年は中古文学会が40周年で、私も頼まれてシンポジウムに行きましたが、昨年は中世文学会が50周年、和歌文学会もそうでした。ついでに、私の勤めております立教大学の日本文学科が今年50周年で、ちょうど一週間前に2日間国際会議をやりました。時期的にみても研究を見直し、総括すべき時代にきていると、改めて認識させられます。

ということで、今回の研究集会はこれで終了いたしますけれども、来年度11月にここでまた開催される予定ですが、来年度がこの場所で行う最後になりますので、日程もご案内がありましたように、11月の15日、16日の2日間で決まりましたので、是非またおいでください。

来年、国際集会が終わると、この場所に、引越しのためのダンボールが山とつまれるという、想像したくない光景が出現するそうですので、そういうわけで、30年間、ここの会場で国際集会が開かれてきましたが、来年で打ち止めになります。再来年からまた立川の新しい所で開かれるということで、この国際研究集会もまさしく、見直しの時期に来たと感じております。

ということで、最後のご挨拶とさせていただきます。どうもありがとうございました。